カムサ語における人称と数の標示の概要

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授　蝦名　大助

【目次】

１．はじめに
２．音韻体系
３．文法の概要
４．人称と数の標示
５．まとめ

１．はじめに

カムサ語（Kamsá[1]）はコロンビア共和国プトゥマヨ（Putumayo）県シブンドイ（Sibundoy）で話される言語である。話者の多くは町の中心部ではなく“vereda”と呼ばれる郊外に住んでいる。隣接するモコア（Mocoa）県内にも話者が見られるが、シブンドイから移住した人々であると考えられる。Jamioy Muchavisoy(1999: 252) によると、話者人口は約 4,000 人で、うち 30%程度が流暢な話者という。現在では 30 代以下でカムサ語が話せる話者はほぼいないと見られる。言語教育が行なわれているが、公立学校においては行なわれていないようであり、言語は継承されていない。消滅の危機に瀕した言語であると言える。

系統関係は不明である。Fabre(2002: 169) は、「カムサ語は［アンデスとアマゾン］両方の地域の類型論的特徴を備えている」と述べている[2]。民族学者の中には、カムサ族はもともとアマゾン地域に住んでいた、と考える者もいる。以上を総合すると、カムサ語はもともとアマゾン地域で話されていたが、アンデスにやってきたために、一部アンデス的な言語特徴を持つようになった、という筋書きが考えられるが、確証はない。

カムサ語は周囲をインガ語（Inga、ケチュア諸語の一つ）に取り囲まれている他、近隣にはバルバコア諸語やナサ・ユエ語（Nasa Yue、単に Nasa、または Páez とも、系統不明）、コファン語（Cofan、系統不明）などがある。これらのうち、インガ Inga 族はインカ帝国の拡張期にケチュア語化したと考えられている。カムサ語にはケチュア語とスペイン語からの借用語が見られる。

先行研究には Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973)、Howard(1977)、Monguí Sánchez(1981)、Jamioy Muchavisoy(1999)、Fabre(2002) などがある。Juajibioy Chindoy and Wheeler(1973)（以下、「JC&W」として引用する）はカムサ語のテキストと文法の概要を扱った研究である。Monguí Sánchez(1981) は音韻と音声について扱った研究、Howard(1977) と Jamioy Muchavisoy(1999)（以下「JM」として引用する）は動詞形態論について扱った研究である。

これらのうち、Fabre(2002) は他の記述研究を基にした類型論的研究であり、自身は調査を行なっていないようである。21 世紀に入って、カムサ語の記述研究は行なわれていないようである。

筆者は、2013 年 8 月から 9 月にかけて約 1 カ月間、シブンドイでカムサ語の調査を行なった。協力者は 40 代男性で、スペイン語との二言語話者である。本稿では、この調査で明らかになった、人称と数の標示について述べる。

---

[1] Camsa や Kame.ntzá とも。Kame.ntzá が本来の言語名に最も近い表記である。音韻表記では /kamntʂa/ [kamɨntʂa]。

[2] “la lengua kamsá comparte rasgos tipológicos de ambas zonas [la zona andina y la selva amazónica].”

本稿で述べる人称と数の標示については、JC&W と JM に記述がある。カムサ語では、動詞のアスペクトによって異なるパラダイムの人称接辞が用いられるが、これらの先行研究では両者が区別されずに示されている。すなわち、これらの先行研究では、人称接辞としては１つだけのパラダイムを認め、これとは別にアスペクト接辞を認めている。しかし、先行研究の記述では、どの形式がどのような場合に現れるのか予測できないことがある。そのため、２種類のパラダイムを仮定したほうが分析として優れていると考え、本稿ではこれを示す。

人称接辞は、音韻的条件によって異形態をとることがあり、その条件も複雑である可能性がある。まだその全体像は明らかにできていないが、本稿では、現段階で可能な限り条件を整理して、それぞれの形式を示す。

２．音韻体系

カムサ語は記述の少ない言語であるので、本論に入る前に音韻体系と文法の概要について簡単に触れておく。ここではまず音韻について述べる。

母音は a, e, i, o, u の 5 母音が認められる。先行研究は一般に、これらに加え、狭口中舌母音 ï[ɨ] または中口中舌母音の ë[ə] を認める。これらは同じ母音を指している。

先行研究で認められている中舌母音を、筆者は挿入母音と考え、独立した母音音素とは認めない。その根拠としては、i）母音であるという以外に積極的な調音の構えが認められず、周囲の環境に影響を受けた音価をとること ii）どの位置にこの母音が現れるのかが必ずしも決まっていないこと、が挙げられる。実際、出版されているカムサ語のテキストにおいて、同じ語であっても、挿入母音の位置に揺れが見られることがある。

先行研究で挿入母音を独立した音素と見るのは、以下のように母音を持たない音節が見られるからであろう。

(1) tsmbe「インゲン豆」

(1)では、tsm が 1 つの音節を、be が 1 つの音節を成すと考えられる。最初の音節は、先行研究に従えば tsïm のように CVC として分析される。本稿では母音を持たない音節を認め、n や m などは、子音であるが音節主音になりうる、と考える。

アクセントを持たない語末の母音はしばしば脱落する。そのため、母音が脱落しているのか、もともと母音がないのか、分からないことがある。

子音音素として、p[p], t[t], k[k], b[b], d[d], g[g], ts[ts], ch[tʃ], tʂ[tʂ], dʒ[dʒ], s[s], sh[ʃ], ʂ[ʂ], h[h], m[m], n[n], ñ[ɲ], l[l], r[r], w[w], y[j] を認める。先行研究では両唇摩擦音ϕを独立した音素として認めているが、本稿では h または p の異音と考えておく。また、h は先行研究の x にあたる。先行研究ではこの音素を軟口蓋摩擦音 [x] としているが、筆者の調査では軟口蓋音というよりも声門摩擦音 [h] と見たほうがよいと分析したため、/h/ で示す（ただし、様々な環境異音を持つことは言うまでもない）。

アクセントについては詳細は不明である。先行研究ではストレス・アクセント言語とされているが、筆者の観察では、語に特有の音調も認められる。今後研究を進める必要がある。なおテキストを見ると、語末にアクセント記号が書かれた語が比較的多く見られる。

３．文法の概要

３．１．形態論

接頭辞と接尾辞が認められる。動詞においては接頭辞のほうが優勢であり、名詞では接尾辞が優勢である。

類別詞が認められる。

(2) shmno-be「卵」

(3) tsm-be「インゲン豆」

-be は丸い物体に付く類別詞である。類別詞は義務的であり、*shmno や *tsm だけでは現われえない。

スペイン語からの借用語にも類別詞をとるものがある。

(4) balon-be「ボール」

しかし、借用語とは思われない語でも、類別詞をとらないものもある。

(5) bomo「じゃがいも」

このように名詞は必ず類別詞をとるわけではない。

名詞が類別詞をとるとき、述語となる形容詞はこれに一致しておなじ類別詞をとる。

(6) kem shmno-be mehor-be.
this egg-CL good-CL
「この卵は良い。」

３．２．統語論

語順は比較的自由である。

(7) cha tbo-nhabwame[3] twamb.
3 3DU-buy.PERF chiken
「彼（女）がにわとりを買った。」

(7) では主語である cha「彼（女）」が述語動詞に先行して現れ、目的語は後に現れている。目的語は述語動詞に先行して現れることもできる。また自動詞の場合には、主語が動詞の後に現れる例も見られる。

動詞に付く人称接頭辞は、主語と目的語の人称と数に一致する。(7)では主語が３人称単数、目的語も３人称単数であるため、動詞には３人称双数の人称接頭辞 tbo-が付いている。人称接頭辞は義務的に付く。

名詞修飾は前から行なわれる。

(8) mehor shmo-be
good 卵-CL
「良い卵」

先行研究ではコピュラが認められるとされているが、筆者の調査では見当たらなかった。

(9) kem shmo-be mehor-be.（＝(6)）
this egg-CL good-CL
「この卵は良い。」

名詞抱合が見られる。

(10) son-tsa[4]-ʂek-pshatsha.
3>1-ASP-leg-swell
「私は脚が腫れた。」
(lit.「脚が私を腫らした」)

(10)ではʂek「脚」が抱合されている。ʂek は拘束形であり、自立形はʂekwats である。身体語彙が抱合されるようである。ほかには、「頭」を意味する beʂ（拘束形）などがある（自立形は betʂaʂ）。

４．人称と数の標示

４．１．普通名詞

名詞に -ta が付くと双数を、-nga が付くと複数を表す。これら数を表す接尾辞の付加は義務的ではない。同じ接尾辞が動詞にも任意に付くことができる。JC&W(p.63) は、単数を表す -a があると述べているが、筆者は確認できていない。

[3] -nhabwame「買った」はさらに分析できる可能性があるが、本稿ではこれ以上分析しないでおく。

[4] -tsa- はアスペクトを表す接頭辞だと思われるが、詳細は不明である。

４．２．代名詞

以下の人称代名詞がある。

１人称単数　atʂ
２人称単数　ak
３人称単数　cha
１人称双数　bndat
２人称双数　tsndat
３人称双数　chat
１人称複数　bng(a)
２人称複数　chabtang
３人称複数　chng

双数代名詞の語尾 t は、双数接尾辞 -ta と同源であるだろう。同様に、複数代名詞の語尾 ng は、複数接尾辞 -nga と同源であるだろう。これらの代名詞がそれぞれ共時的に２つの形態素から成ると分析すべきか、１つと分析すべきか、筆者にはまだ分からない。語末の母音 a の脱落についても、任意なのか、脱落した形だけになってしまっているのか、よく分からない。ただし、１人称複数代名詞については、bng と bnga の両方が観察できる。

人称として１・２・３人称、数として単数・双数・複数が区別される。以下で述べるように、動詞人称接辞も、人称と数に応じて異なる形をとる。ただし、代名詞とは異なるところがある。すなわち、人称接辞については、１人称の双数と複数で、除外形（exclusive）と包括形（inclusive）が区別される。ところが、代名詞にはこの区別が見当たらない。

４．３．人称接辞

動詞には、主語と目的語の人称と数に応じた接辞が付く。数を表す接尾辞として、-ta（双数）、-nga（複数）があるが、これらは任意である。またこれらは名詞に付く接尾辞と同じものであると考えられる。これら以外の人称接辞はすべて接頭辞であり、義務的に付く。人称接頭辞は動詞語幹だけに付き、名詞語幹には付かない。以下に例を挙げる。

(10)　cha　tbo-nhabwame[5]　twamb.
　　3　3DU-buy.PERF　chiken
「彼（女）がにわとりを買った。」

(10)では、動詞に付いている tbo-（３人称双数）は主語である cha「彼（女）」と目的語である twamb「にわとり」両者に一致している。しかし自動詞では、同じ tbo- が、主語のみに一致する。

(11)　atʂ-be　wabshe　atʂ-be　kenata
　　1-GEN　brother　1-GEN　sister
　　tbo-nha-ta.
　　3DU-go-DU
「兄（弟）と姉（妹）が行った。」

(11)では tbo- は主語である atʂ-be　wabshe「兄（弟）」と atʂ-be　kenata「姉（妹）」に一致している。

動詞が完了アスペクトか未完了アスペクトかによって、異なる人称接頭辞が付く。JC&W や JM は、人称接頭辞のパラダイムとしては１つだけを認め、これとは別に、完了と未完了を表す接頭辞をそれぞれ認める。筆者は、独立したアスペクト接辞を認めるのではなく、異なる人称パラダイムを認めるほうが分析として優れているのではないかと考えているが、この分析の違いについてはあとで触れる。

カムサ語の動詞の活用は複雑であり、他動詞の人称標示についてはまだそのすべてを明らかにできていない。そこで本稿では、自動詞のパラダイムについて、未完了アスペクトと完了アスペクトの場合にわけて示すことにする。

[5] -nhabwame「買った」はさらに分析できる可能性があるが、本稿ではこれ以上分析しないでおく。

表１：人称接頭辞（未完了アスペクト）

1sg	s-, ti- (_/h/)
2sg	ko-
3sg	e-
1+2(incl.)du	bo-
1+3(excl.)du	ps- (hs-), ti- (_/h/)
2du	so- (ʂo-)
3du	bo-
1+2+3(incl.)pl	mo-
1+3(excl.)pl	ps- (hs-)
2pl	smo- (ʂmo-)
3pl	mo-

表２：人称接頭辞（完了アスペクト）

1sg	s-, ti- (_/h/)
2sg	ko-
3sg	to-
1+2(incl.)du	tbo-
1+3(excl.)du	ps- (hs-), ti-(_/h/)
2du	so- (ʂo-)
3du	tbo-
1+2+3(incl)pl	tmo-
1+3(excl)pl	ps- (hs-), ti-(_/h/)
2pl	smo- (ʂmo-)
3pl	tmo-

incl. は包括人称（inclusive、聞き手を含む「私たち」）を表し、excl. は除外人称（exclusive、聞き手を含まない「私たち」）を表す。また数には単数（singular）、双数（dual）、複数（plural）の区別がある。

１人称単数はアスペクトにかかわらず s- または ti-（/h/ の直前に現れる場合）で表される。

２人称単数もアスペクトにかかわらず ko- で表される。

３人称単数は、未完了アスペクトの接頭辞として e-、完了アスペクトとして to- を認める。

１人称双数（包括形）は、未完了アスペクトとして bo-、完了アスペクトとして tbo- を認める。

１人称複数（包括形）は、未完了アスペクトとして mo-、完了アスペクトとして tmo- を認める。

１人称双数・複数の除外形は、アスペクトにかかわらず ps-（自由変異の異形態として hs-）で現れる。なお /h/ の直前に現れる異形態として ti- が認められる。

２人称双数として、アスペクトにかかわらず so- だけが認められる。なお、自由変異としてʂo- が認められる。JM ではʂo- のみが挙げられており、ʂo- > so- という変化が起こった可能性が考えられる。

２人称複数として、アスペクトにかかわらず smo- だけが認められる。ここでも先行研究ではʂmo- のみが挙げられており、ʂmo- > smo- という変化が起こった可能性がある。

３人称双数は未完了アスペクトの bo- に対して完了アスペクトの tbo-、複数では未完了アスペクトの mo- に対して完了アスペクトの tmo- が現れる。

すでに述べたように、JM と JC&W は人称接頭辞として完了アスペクトと未完了アスペクトの区別をせず、一つだけのパラダイムを認めている。JM は以下のパラダイムを挙げている。

表３：Jamioy Muchavisoy(1999: 257) の分析

1sg	së-
2sg	ko-
3sg	e-
1du	së-
2du	ʂo-
3du	bo-
1pl	së-
2pl	ʂmo-
3pl	mo-

そしてこれとは別に、完了アスペクトの接頭辞として t- を認める。未完了アスペクトとしては、

JM(p.257) を見る限り n- または V- を認めているようであるが、例文中のグロスには示されておらず、どのような解釈がなされているかは不明である。いずれにせよ、完了アスペクトの接頭辞として t- を認めても、多くの場合、不規則な形態音韻的操作を仮定せざるをえず、正しい人称接頭辞の形式が予測不可能な場合が多い。さらには、完了アスペクトと未完了アスペクトで、人称標示が全く変わらない場合があり（１人称単数など)、この場合には t- の異形態としてゼロを認めなければならないという問題がある。

一方、JC&W(pp.74) は以下のパラダイムを挙げる。

表４：Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 74) の分析

1sg	tsi- (ts-,së, s-, i-)
2sg	ko- (kë-, k-)
3sg	o- (i-, e-, n-, ën-, w-)
1du	bo- (bë-, bn-)
2du	xo- (xë-, xn-)
3du	bo- ((bë-, bn-)
1+2+3	mo- (më-, m-)
1+3pl	ftsi- (fts-, fs-, fsë-)
2pl	xmo- (xmë-, xm-)
3pl	mo- (më-, m-)

JC&W では、表に見られるように様々な異形態を挙げているが、それぞれの音韻的条件については示されていない。また、人称接頭辞と別にアスペクト接辞を認める点では JM と同じである。JC&W は､完了アスペクトの接頭辞 t- のほかに、７つの異なるアスペクト接頭辞を認めている。しかし、その中には人称接頭辞より動詞語幹に近い位置に現れるものがあったり、否定辞のようにアスペクトとは呼べないものが含まれているなど、同一範疇とは呼べないものが混在している。また、JM 同様に、正しい人称接頭辞の形式が予測不可能な場合がある。

以上から、人称接頭辞の前に付くアスペクト接頭辞を認めるよりは、完了アスペクトと未完了アスペクトの２つのパラダイムを認めるほうがいいと思われる。ただし、bo-/tbo- 、mo-/tmo- の対応があることから見て、歴史的には t- がアスペクトを表す接頭辞であった可能性はあるだろう[6]。

以下では、本稿と JM、JC&W の分析で異なっているところを見ていく。特に、先行研究では除外形と包括形の区別がされていない場合がある。JM および JC&W が挙げる人称接頭辞のパラダイムは、本稿の未完了アスペクトの接頭辞に対応すると思われる。以下にそれらをまとめた表を挙げる。

表５：パラダイムの比較

	筆者	JM	JC&W
1sg	s-, ti-	s-	tsi-
2sg	ko-	ko-	ko-
3sg	e-	e-	o-
1+2	bo-	s-	bo-
1+3	ps- (hs-)		
2du	so- (ʂo-)	ʂo-	xo-
3du	bo-	bo-	bo-
1+2+3	mo-	s-	mo-
1+3pl	ps- (hs-)		ftsi-
2pl	smo- (ʂmo-)	ʂmo-	xmo-
3pl	mo-	mo-	mo-

以下、食い違っているところを１つ１つ検討していく。

１人称単数については、JC&W のみ異なる tsi- という形式を挙げるが、これは古い形であるか、音韻的条件による異形態と思われる。

３人称単数についても JC&W のみ異なる o- という形を挙げる。これも異形態かと思われる。実

[6] JC&W(p.72) は２人称の形式として tko を挙げているが、筆者の調査では認められなかった。

際、JC&W は異形態の１つとして e- を挙げており、これは筆者や JM と一致する。

最も食い違いがあるのが１人称双数の形式である。まず、JM は包括人称と除外人称の区別をせず、së- だけを挙げる。これは本稿での ps-（1+3）に対応すると思われる（p の脱落した形）。一方、JC&W(p.74) は bo- が “primera y tercera persona dual (nosotros dos, ellos dos)” を表すとしている。スペイン語訳から見て、「１人称双数、もしくは３人称双数」という意味だと思われるので（「１人称＋３人称」という意味ではなく）、ここでも包括人称と除外人称の区別がされていない。そしてこの形式は本稿での bo-（1+2）と一致している。この食い違いについて、もっとも自然な説明は、JM は除外形の së- のみを挙げ、JC&W は包括形の bo- のみを挙げている、というものであろう。筆者のデータが間違っており双数については除外形と包括形の区別がない、という可能性もありえるが、仮にそうだった場合に、JM と JC&W が全く音形の似ていない形式を挙げるのは不自然だからである。

２人称双数については、ʂo- > so- > xo- という音変化があったか、異音である可能性が考えられる。２人称複数についても同様である。

１人称複数については、本稿で除外形として挙げる ps- が së-、ftsi- と対応する、と考えればよいだろう。f は p の弱化した形と考えられる。ts と s の対応は、s が ts の弱化した形であるかもしれない。もしくは ftsi- と ps- が異形態である可能性も考えられる。së- は p（または f）が脱落した形だろう。

４．４．代名詞と人称接頭辞のずれ

これまで見てきたように、人称接頭辞には除外形（exclusive、聞き手を含まない「私たち」）と包括形（inclusive、聞き手を含む「私たち」）の区別があるのに対し、独立代名詞には除外形と包括形の区別がない、という奇妙な現象がある。そもそも JM は人称接頭辞においても２つの区別を示していないし、JC&W は複数では２つを区別しているが、双数では区別していない。

隣接するケチュア諸語は、独立代名詞にも、動詞の活用においても、除外形と包括形の区別がある。１つの可能性として、カムサ語はもともとこの区別をもっておらず、ケチュア語との接触によってこの区別を獲得した、ということが考えられる[7]。この接触が比較的最近のもの（１５世紀以降）であるため、除外形・包括形の活用が不安定であるのかもしれない。もう１つの可能性としては、大部分の話者がスペイン語との二言語話者になっているために、人称接頭辞についてもこの区別がなくなりつつある、ということなのかもしれない。スペイン語には除外形と包括形の区別がないからである。Jamioy Muchavisoy と Juajibioy Chindoy はそれぞれカムサ語話者であり同時に研究者であると思われるが、スペイン語との二言語話者であるはずである。いずれの可能性についても、今後さらなる調査が必要である。

５．まとめ

本稿では、カムサ語における人称と数の標示の概要を示した。数については単数と双数、複数の区別があり、普通名詞、代名詞、動詞で示される。動詞に付く人称接頭辞にも単数、双数、複数の区別があり、また除外人称と包括人称が区別される。先行研究では人称接頭辞について１つのパラダイムしか提示されていないが、本稿では、完了アスペクトと未完了アスペクトの２つのパラダイムを設けたほうがいいと思われることを述べた。

カムサ語は形態音韻論がかなり複雑であるが、本稿ではほとんど触れることができなかった。それぞれの人称接頭辞について、異形態と、形態音韻的な条件を明らかにする必要がある。実際、先

[7] 言語接触による文法的特徴の獲得については、ケチュア諸語とアイマラ語族についても、長期間の接触により、文法的によく似た特徴を持つようになった、と言われている。

行研究と本稿とで食い違っているところは、異形態である可能性がある。また、本稿では自動詞の活用だけを挙げた。他動詞についても活用を明らかにする必要がある。活用には主語や目的語の有生性（animacy）が関係している可能性もあり、この点についても注意を払わなければならない。

略号一覧

1	1 人称
2	2 人称
3	3 人称
3>1	3 人称主語／1 人称目的語
ASP	相(aspectual)
C	子音(consonant)
CL	類別詞(classifier)
du/DU	双数(dual)
excl	除外人称／除外形（exclusive)
GEN	属格（genitive)
incl	包括人称／包括形（inclusive)
PERF	完了(perfect)
pl	複数(plural)
sg	単数(singular)
V	母音(vowel)

参考文献

Fabre, Alain (2002) Algunos rasgos tipológicos del Kamsá (Valle de Sibundoy, Alto Putumayo, sudoeste de Colombia) vistos desde una perspectiva areal. in Mily Crevels, Simon van de Kerke, Sérgio Meira and Hein van der Voort (eds.) *Current Studies on South American Languages*, pp. 169-198. Leiden: Research School of Asian, African, and Amerindian Studies.

Howard, Linda (1977) Camsa: Certain Features of Verb Inflection as Related to Paragraph Types. in Robert E. Longacre (ed.), *Discourse Grammar: Studies in Indigenous Languages of Colombia, Panamá, and Ecuador,* part 2, pp. 273-299. Dallas: Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arlington.

Jamioy Muchavisoy, José Narciso (1999) La lengua kamëntsa: estructuras predicativas. in *Lenguas Aborígenes de Colombia*, Memorias 6. Bogotá: Universidad de los Andes - CCELA.

Juajibioy Chindoy, Alberto and Alvaro Wheeler (1973) *Bosquejo etnolingüístico del grupo kamsá de Sibundoy, Putumayo, Colombia*. Instituto Lingüístico de Verano.

Monguí Sánchez, José Raúl (1981) *La lengua kame.ntzá: fonética - fonología - textos*. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo.